

以上をまとめると、化粧が礼法と結び付けられて説かれる時、基本的なスタンスは以下のように考えられるのである。

一、化粧をしないのは失礼であるから、しなければならない。

二、「薄化粧」をよしとする。

三、TPOをわきまえる。

### 【注】

1 刊年不明。架蔵本は刊記がないが、表紙見返しに「植村玉枝子編述／女中庸瑠箱／浪華書肆 文英堂蔵版」とある。

2 本文は長友千代治校註『女重宝記・男重宝記』（一九九三年、社会思想社）による。

3 架蔵本の刊記は以下の通りである。

「嘉永三戌春新彫

奥州仙台 伊勢屋半右衛門

下総佐原 正文堂利兵衛

越後三條 扇屋七右衛門

信州善光寺 蔦屋伴五郎

同 松本 高美屋甚左衛門

甲府 村田屋孝太郎

上州高崎 沢本屋要蔵

江戸 和泉屋市兵衛

## 七 お歯黒

(翻刻)

歯黒は毎朝すべし。歯さきの白くはげたるは見ぐるしき物なり。惣じて女のけわいは早朝の事なり。人いまだおきざるうちに顔あらひ髪ゆふ事女の作法なり。

お歯黒は、婚礼のおりの重要な儀礼でもあり、婚礼関連記事にとりあげられることが多く、化粧関連挿し絵で最も多く描かれる。

白粉も紅粉も薄々としているのがよしとされるのに対し、お歯黒は黒々と濃いのがよしとされ、はげることが問題とされることが多い。こでも見苦しいとされる。

また関連して女性が化粧する時間帯についても述べられている。化粧はすべきものであり、それをしていない姿は見苦しいなどといった評価がなされるため、化粧する前の姿を他人に見られる前の時間帯、すなわち早朝をもつてよしとされている。勿論、化粧をするためだけに早起きするのではないことは、いうまでもあるまい。こうしたことはよく説かれることで『緑百人一首』(注3)にも以下のようにある。

婦人の紅粉をほどこす事は驕奢風俗にはあらず。礼容をと、のへ面のつぎくしきをかくし、愛きやうを添んがためなり。又嫁しては舅姑夫につかふまつるれいなれば、かならず朝にはやく起て、湯をつかひ、髪のみだれたるを正し、紅粉をばほこして、人に寝乱髪のみだれたる寝ぼけ顔の気うときを見する事なかれと、いにしへ

の聖もいましめ置れし事なれば、これ婦女子の第一のたしなみと心得べきなり。

## 八 まとめ

『女訓小倉文庫』の記述は、老人が昔を基準に自分より若い者を批判するとか、流行があるから職人や商人が繁盛するといった、現代にも通ずる人間や社会の捉え方にも興味深いものがあるが、礼法と化粧を考えるときにも重要な示唆を与えるものである。

まずはじめに、女性が化粧をする行為は「女の礼」としている。すなわち、化粧はしなければならないもので、化粧をしないのは失礼であるということである。

次に「けばくしかぬをよしとすべし」「ほのかにうすく」とあるべし」「あまり目た、ぬやうに」「うすきがよし」と、同様な記述がほぼ各項目にあることから明らかのように、人に目だたないこと、すなわち薄化粧をよしとする。しかし当時も厚化粧は存在していたと考えられ、礼儀作法上は「はでにして、いやしく、見ざめのする物」であっても、礼法に価値を置かない者ならば、魅力的なものでありえ、遊女の始めたものが庶民に流行するのはそれが一つ要因であったと考えられる。

次に「其所のふうにしたがふべし」とあるように、場所をわきまえねばならない。また女は、化粧をせぬ姿を他人に見られない早朝にしなければならぬとする。これは明治時代の女子教育でとりあげられる「容儀」に継承されていく。

草にも書たれば、女風流の第一は髪なり」（『女重宝記』）といった記述がなされる。

また『女重宝記』はこの後に次のようにある。

多と少と長と短と太と細とは、人々生れつきなればぜひなし。色黒くしなやかならんは、朝夕の心がけによるべし。髪形といへば、髪のつや／＼美しくこぼれかゝりたるは、顔立にかたなれども、よく見ゆるものなれば、女中の別してたしなみ給ふは髪なり。朝寝して寝乱れ髪を夫に見せ給ふ事有べからず。

どちらがよいかは記されていないが、多く、長く、太い髪が望ましいと考えられる。さらに色黒く、しなやかであることをよしとしている。ここでは礼法的観点ではなく、視覚的美しさの観点で述べられているといつてよいだろう。さらにこの後に、髪油、髪の赤いのをなおす薬、髪の垢落としの薬、毛生え薬があげられている。髪の匂い、赤毛、汚れ、薄い毛が美容的には問題であったことも知られる。

また「櫛」などの化粧道具は必要だが、化粧品は必ずしも必要としないこともあつてか、次の記述が『女中庸瑠箱』に見られる。（翻刻にあたり送りがないを補うなどした）

凡て女房は潔すべし。形の善悪は生質なれば是非なし。東坡曰、貧家は淨く地を払ひ、貧女は常に髪を梳くべしと。此心は、玉楼金殿のけつかうな家は塵無きもの也。又有りても見苦しくもなし。賤がふせやのいぶせき所はむさくみゆる物なれば、切々水を澆ぎ、塵を払ひ清むべしと也。又上つかたを初め富家の婦人は、有りしながらの粧にて、身を化粧玉はね共、清らかにみへ、貧しき賤の女は、身

に綾錦を着る事こそ及びなく共、せめては髪をけづりて、むさく思はれぬやうに身を嗜むべし。

貧乏でも、せめて髪の手入れをしなさい、ということで、髪は最低限の身嗜みであつた。

## 六 白粉

（翻刻）

白粉はうすぎがよし。つねに顔を能みがきて薄く付れば、そこづやありて美しき物なり。

白粉に関しては、先述の『四季文章女用婦見硯』のように、持統天皇の時代に観成が始めて作つたとする『日本書記』の記事の紹介がなされることが多い。『女重宝記』では、持統天皇が白粉をぬられ、「されば白粉をぬる事、女のさだまれる法にして、色どり飾るためばかりにあらず。祝義にたつなり。憂有ときは、白粉をせぬ故なり。しかれば、女と生れては一日も白粉をぬらず素顔に有べからず」とする。「ためばかりにあらず」という表現の仕方に主要な理由は「色どり飾るため」であつたことがうかがわれる。

白粉はぬる、ぬらないといった選択ではなく、どのようにぬるかが問題とされるものであり、『女重宝記』でも薄々とぬることをよしとしている。

ごとし。齟齬笑とは、齒のいたみて悦ばしからぬ中に笑をふくむかたち也。此品形は孫寿といへる女、自分の容儀を愛して、侈の中より作り出して、時行らしけるが、程なく孫寿も身亡けるとかや。惣じて異様な事を嗜べば、天より誠め給て、災来り、身をくるしむるもの也。よくくつ、しむべし。

目立たぬことがよしとされ、そのために「愁眉」といった不健康ともいえる化粧など、異様なことも否定されている。

#### 四 額

##### (翻刻)

ひたいの際墨はいかにもほのかにうすくとあるべし。そのさま雲ゐの雁の羽をのしかすみをするにたぐひすといへり。

額の作り方については、元禄五年（一六九二）に刊行された『女重宝記』（注2）に以下のようにある。

額のつくり様、大額、小額、丸額、瓦灯口、剃上額、みな人々の生れ付に応じて、大顔、小顔、丸顔、長き顔、短き顔をはからひつくり給ふべし。際墨は成ほど薄々と、高根の花に霞のか、れる体に、小額より上にて引すて消すべし。左の方歪みたがるものなり。鼻筋を中墨とし給ふべし。

薄々とする点が同じである。例えば嘉永五年（一八五二）に上梓された高井蘭山撰『女式目』など、『女重宝記』の記述は後にしばしば転載さ

れているため、知識としては普及していた可能性はあり、その影響を受けたかもしれない。額の作り方は他の化粧関連記事に比較して掲載されることは少ない。往来物の読者層が、そうした知識をさほど必要としなかったということとも考えられる。

#### 五 髪

##### (翻刻)

髪は当世のゆひやうしなくありといへどもみな遊女などのゆひ始め、はやり出す物なれば、いづれ其風はでにしていやく見ざめする物なり。只それ／＼のにあはしき風にゆひ給ふべし。さりながら御所方武家方町方の風それ／＼のわかちもあれば、とかく其所のふうにしたがふべし。古風なるがよしとて、むかしの髪のゆひやうにもならず。若き女中は時の風俗にしたがふは宜しけれども、あまり目にたゝぬやうにゆひ給ふべし。老たる人のくせとして、我わかかりし時の風をいひ出して今の風をそしる物なれど、是大なるあやまり也。万の事時々うつりかわる事は髪の風ばかりにあらず。小袖の染色もやう其外櫛かうがいのみなりまして、十年廿年の内には悉かわる物也。かわればこそ、職人も商人もはんじやうする事なり。

「先髪形と諺にいへるごとく髪にて大に形のかはるもの也」（『女諸礼綾錦』）と髪形は重視された。髪に関してしばしば引用されるのは『徒然草』であり、「女は髪のためだからこそ人の目たつべけれど、徒然

している点から、両者に何らかの影響関係のあることがうかがわれる。ただし、どちらがどちらの影響を受けたのか、もしくは共通して影響を受けた別なもの—例えば『女重宝記』—が存在するのかについては不明である。

さて、何故、女性が化粧をするのかの理由が、ここに見られる。すなわち「顔色をます」と「女の礼」である。「顔色をます」とは美しくなるための化粧であり、「女の礼」とは身嗜み、すなわち礼法としての化粧であり、儀容とされるものである。「あながちに」とあることからすれば、当時の女性が化粧をするのは、まずは「顔色をます」ものであったと想像される。身嗜みや儀容といったことは、礼法において重要事項である。

また往来物が有する教育的性格から、物事の由来・来歴が説かれることが多いが、化粧に関してもその例外ではなく、起源などが説かれることがある。これは化粧に関する知識・教養といった類といえよう。そこに見られる基本的価値観は、古いことに価値があり、歴史上の有名人がかかわっていることが望ましい。また日本の場合には『古事記』や『日本書紀』に見られ、中国ですで行われている、もしくは存在していることが望ましい。『四季文章女用婦見硯』の場合はそれが顕著であるといえよう。

### 三 眉

(翻刻)

眉は貴賤をしなければ今は墨をひくなり。是むかしの遊女の風なり。それ眉のかゝりはほのかなるを遠山のかすみにとへ、又弓張月のいるにもたとへたり。たゞゆふくにして、けばくしからぬをよしとすべし。

『婦人教訓要書』では本文の異同があり、「ゆふくにして」が「悠遠にして」とある。

整形手術のなかった時代、顔中に於いて、剃るもしくは抜いて、さらには描くことによつて、眉は思いのままに形を変えることの可能な唯一の箇所であった。その形に応じて、様々な比喩的呼称がある。

さて「けばくしからぬをよしとすべし」とあるように、礼法としての化粧は、派手で人目に付く化粧に関して否定的である。これは往来物の化粧関連によく見られる傾向である。女性向け往来物は、三従七去などが掲載されたりする情報媒体であるから、そうした観点での配慮がなされたものともとらえられる。

なお『女中庸瑠箱』（注1）には以下のようにある。

婦人の身持はたゞ内端に目だたぬやうに有たし。惣じて衣服櫛笄女のもてあつかう道具、時の流布物は、其節ひときはあたふ敷、目さむる心地すれども、漸世間に広まりぬれば、目じめて用ひがたし。たゞいつ迄も用ゆる様に古風めきたるものは、いつにても用やすし。唐にも時粧の風説世行し、貴賤の女、此を学ぶ。愁眉、啼粧、折腰歩、齟齬笑といふ事、時行れり。愁眉とは、眉をほそくつくりて曲、くじけてかゝむがごとし。啼粧とは、うすく白粉を目の下にぬり、ぬぐう啼がごとし。折腰とは、ぬき足して、こしのいたむが

藤岡屋慶次郎

江戸書肆 山口屋藤兵衛

森 屋治兵衛

大黒屋平吉板

また同じ内容が明治三十六年に馬喰町三丁目山口屋書店より刊行された『今様源氏百人一首』にも「女中平生身持鑑」として載る。

勝村常欣が著したものと断定してよいかは躊躇されるが、繰り返し掲載されたことは事実であり、それなりに普及したものとえよう。

なお『女訓小倉文庫』には「女中身持粧ひ鑑」に付随して「婦人三十二相花に寄するの歌」が十首、絵入りで載る。周知の如く「三十二相」は「女性の容貌などの理想的なすべての美」の意でも使用され、女性の理想的な美を知る資料となるので、以下にあげる。なお、翻刻にあたり適宜漢字を平仮名にするなど表記をあらためた。

- ・顔の色はうす紅梅に雪化粧遠山まゆに際すみの雲
- ・くちもとは桜のつぼみ紅粉つけて眼もとのあひにこぼる鼻すじ
- ・芍薬のたてる姿や居姿はぼたんか萩の風にふすなり
- ・糸柳の腰つきよりも歩き形かづきの霞裾の若草
- ・海棠の雨にしほる、泣き姿花の笑顔に含む鉄漿
- ・水仙の花の手つきや早蕨の指つきにさす爪への花
- ・ふりつもる雪の帽子に入る山の衿つきやさししのぶものごし
- ・青柳の髪をけづれる黄楊の櫛たけ長きよりみだる筭
- ・蓮葉の水より出る起き姿濁りにしまぬ浮き草の帯
- ・二重三重卯の花がきの抱へ帯脚布はちらりと重たんば、

## 二 序文について

「女中身持粧ひ鑑」は序文と、眉、額、髪、白粉、齒黒の五項目から成る。以下、それぞれについて翻刻をあげ、その記述について述べることにする。なお翻刻にあたっては私に句読点を付す。

### (翻刻)

それ紅粉翠黛は女色を彩の具なりと漢家本朝に至りて是を愛す。代々の美人みな輕粉をたやさぬ事は歌により、詩につくりたり。されば女の白粉紅粉をもつていろいろ事あながちに顔色をますばかりの事にあらず。是女の礼なれば、その心をもつて、おしろいをかるく紅粉などつくるもそのこゝろへあるべきなり。

これと同様の内容を記すものに、江戸中期刊とされる『四季文章女用婦見硯』（撰津・敦賀屋九兵衛板）の頭書「化粧の仕やう」がある。それは以下の通りである。

紅粉翠黛は婦人の彩第一の具也。白粉燕脂のはじまりは、殷の紂王の後姐己にはじまり、我朝にては持統天皇の御宇沙門觀成始て鉛粉を焼て造りはじめしとなり。これひたぶる顔色を彩り、媚をもとむるのみにあらず、婦人の礼となれり。去るがゆへに喪中には紅粉を施こすことなし。こゝをもつて婦人つねに紅粉を絶す事あるべからず。

紅粉翠黛を「彩の具」「彩第一の具」、化粧を「女の礼」「婦人の礼」と

# 化粧と礼法——「女中身持粧ひ鑑」を中心に——

## The Make up and the Manners

陶 智 子

SUE Tomoko

ことも問題がある。まずは視野に入ったものをもって報告等を重ねていくことが肝要と考えられる。そうした考えのもと、本稿は、女性向け往来物に掲載される「女中身持粧ひ鑑」を中心に、化粧と礼法に関して考察を加えるものである。

### 一 「女中身持粧ひ鑑」について

「女中身持粧ひ鑑」は管見に入るところでは、『女訓小倉文庫』に載るものを初出とする。架蔵本の『女訓小倉文庫』は「作者 勝村常欣」「書画一筆 下川辺拾水」とあり、刊記は以下の通りである。

明和九壬辰年九月吉日

東都書林 日本橋通壺丁目 須原屋茂兵衛  
花洛書林 南町通松原下ル町 勝村治右衛門

「女中身持粧ひ鑑」は、二十二年後の寛政六年（一七九四）に刊行された『増補頭書女今川千代見種』にも掲載される。架蔵本の刊記は以下の通りである。

寛政六歳甲寅六月吉辰

御江戸常盤橋御門ヨリ本町筋下ル八丁目

地本問屋 通油町 鶴屋喜右衛門版

また漢字表記などの相違はあるが、ほぼ同文のものが『婦人教訓要書』に載る。それには題を「女中平生身もち鑑」とする。架蔵本は刊年が記されていないが、江戸末の刊行と思われる。以下の版元が載る。

菊 屋幸三郎

### はじめに

江戸時代に出版された、いわゆる往来物は、小泉吉永氏によって研究・調査がすすめられ、小泉氏によって『往来物解題辞典』も上梓されたが、どれほどの数が出版されたかについては「膨大な数」といった表現しかしがないのが現状のようである。全体像が把握できぬ中では、往来物を資料とした言説は、常に中間報告的性格を帯びざるをえないものである。しかし、全体をとらえることが困難であるからといって、文化研究としての資料的価値が高いと考えられる往来物の記述を放置しておく